デモンストレーション行事が参加者に与える運動行動の変化

The changes of exercise action given to participant by demonstrating event

1K10C213-6　清水 咲希
主査 木村和彦先生　　副査 間野義之 先生

【目的】

筆者は、今年 2013 年国民体育大会が地元東京で開催されるということで関心を寄せていた。また、在学中に「スポーツ基本計画」が策定され、2020 年東京オリンピックの開催も決定したことで、今後、生涯スポーツの普及、地域スポーツの活性化によって、スポーツ立国を目指していく必要があると強く感じた。開催地に在住・在学・在勤の人であれば誰でも参加のできる国民体育大会のデモンストレーション行事ならば、参加者の運動行動に変化を与え、国民各層のスポーツへの関心を高め、地域スポーツの普及、活性化という国民体育大会の開催目的を果たすことができ、スポーツ立国の実現へつながると考えた。そして、実際に、デモンストレーション行事が国民体育大会の開催目的を果たしているかを検証したいと考えた。

そこで、デモンストレーション行事開催種目の普及状況を踏まえて、デモンストレーション行事のイベント評価、今後の参加意欲を調査することで、国民体育大会の開催目的を果たしているかということを検証する。さらに、デモンストレーション行事開催 1 か月後に追跡調査を行い、参加者の運動行動に変化を与えているかということを検証する。よって、本研究の目的は、

1．デモンストレーション行事のイベント評価
2．デモンストレーション行事参加者の 1 か月後の運動行動の変化を検証する

以上の 2 点といえる。

【方法】

本研究では、第 68 回「スポーツ祭東京 2013」でデモンストレーション行事を開催した市区町村の中から、初心者でも行うことが可能な体験コーナーを設けている稲城市・ユニホック、東大和市・スポーツチャンバラ、豊島区・キンボールの参加者を対象に質問紙調査を実施した。調査期間は 9 月 15 日～10 月 6 日とした。追跡調査は承諾を得られた人のみに、電話、メール、郵送を用いて行った。調査期間は 11 月 1 日～11 月 10 日とした。

第 1 回目の調査内容は、運動習慣、よくおこなう種目、種目経験、参加意欲、満足度、今後の参加意欲とした。追跡調査の内容は、運動習慣、運動行動の変化、開催種目の運動行動の変化とした。有効回答数は第 1 回目の調査で 161 件、内訳は稲城市 88 件、東大和市 13 件、豊島区 60 件であった。追跡調査の有効回答数は 21 件で、内訳は稲城市 8 件、東大和市 5 件、豊島区 8 件であった。

結果は IBM SPSS Statistics 20 を用いて、一元配置分散分析（Tukey HSD）、平均値、度数分布の比較を行った。$p=0.05$ 以下を有意水準とする。

【結果】

デモンストレーション行事のイベント評価は、参加意欲、満足度、今後の参加意欲が高いという結果が得られたので、参加者の期待に応え、満足感を与えていることから、参加者の交流、地域の活性化という役割を果たすイベントとなっていることが明らかとなった。また、各都市間で運動習慣、今後の参加意欲には有意な差は認められなかったが、種目経験、参加意欲、満足度には有意な差が認められ、よく行う種目も地域によって違いが認められた。

しかし、追跡調査では、運動行動への意識には変化が認められるが、実際の運動行動には変化が認められないという結果になった。

【考察】

第 1 回目の質問紙調査を分析し、調査会場で大会運営に携わる人の話を聞いた結果、参加者のデモンストレーション行事に対する評価は高く、また、参加者のみならず、大会運営に協力していた人も支えるという点で尽力しており、地域が一体となっていると感じられた。ゆえに、デモンストレーション行事は地域住民の交流や地域の活性化、地域スポーツの発展という、国民体育大会の開催目的を果たしていると考えられる。

しかし、追跡調査によって、運動行動への意識には変化が認められるが、時間や場所などの物理的疎外要因によって、実際の運動行動には変化が認められなかったので、今後は、運動行動への意識の変化を、実際の運動行動に反映できるような環境を作っていくことが必要であると考える。そのためには、物理的疎外要因の詳細な調査、そして、物理的疎外要因を取り除くための対策が必要となるであろう。